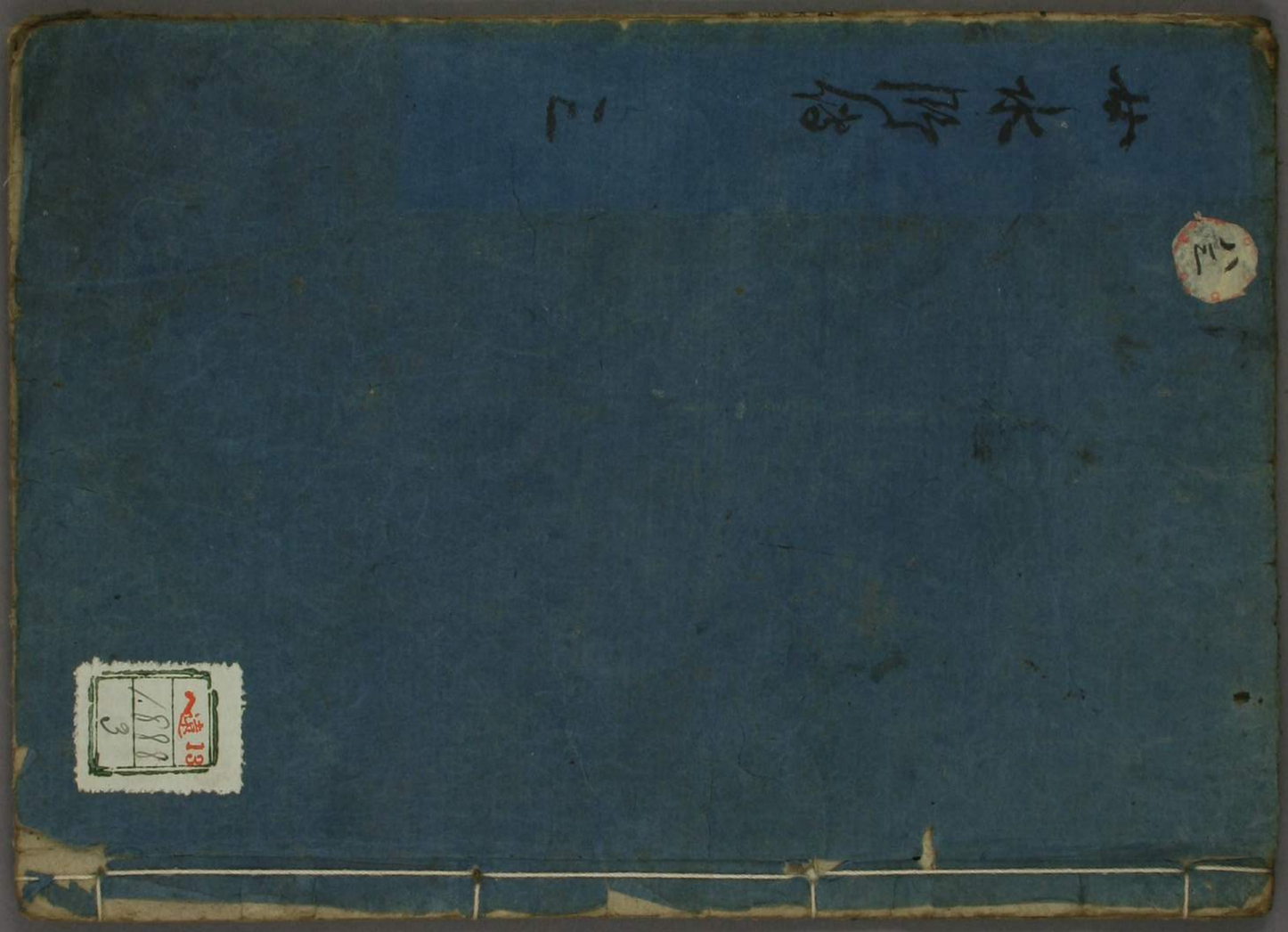
KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



[illegible]

水滸傳卷之三

第五回

朝潮寺[illegible]
春雨[illegible]父[illegible]

[illegible]

13
888
3

女水滸傳卷之三

第五回

朝路文弘歌いく很僕る通一
春雨父弘夫ふく継母と害を

鬼花間が妻八春雨ふく摂州祇園過八長ふの春弘姫
ちゃと幼さより貌肥肖高くカ量ふ携ま顔も亦嬰び
年長すふ小陸ふ小長大弘婦ふく心亜く擔ちそふく
ゃ力強を好ふく人渾名ふく今巴ふほ名ふく都宮ふく叔
牧乃客亭を開き往来弘旅客を雨薛子
子なりけまびを長ず妻八朝路ふく心邪曲ふく姓姫涼く
数孤き淫婦ふり長八亜傷ふ者ふく心頭く妻を恐ふを
墓ふ亜八妻亜を我門ふ捨ま我稚ふく弘幼八深く

無ちんと妻小濃一包に拾ひ出んとこゝろ小朝路もまぐ
るを好きに成同意しく生育ふまを雨も長ご實子ること
を知ず拾まてよく思ひ心をきく好者りを那
あけるこ夫平を出るりに本ら対を必ずに無成有りて教日
遥富一ゝる也へ長胡路を釈熟ゝ物を客意蹂ゝ物ず要
雨も婢僕と同く飲食八宮師は心を分てあーらひに夫平
夫を常に力弟を武術の事を法ゝ者ゆへ第ゝ四ひ遥富の
間戯を小力を競る小夫平を子ふ財ゝ小武藝を
教ゑる小心さゝゝ子ゝ通得ゝ後ゝ七一般の平菊ゝ知
ふいに乃程よりゝ密通ゝ十分潤澤とゝ子ゝ父母も
ゝ小こゝ我知ゝ以ゝ夫平を八遥富の名ゝ財を

費すことと厭ざる也へ福者ゝと成ゝれ小他を法を次
してゝゝ小此家小人ゝく仕ゝ者二ゝの僕ゝ乖巧なる
者ゝく媚諂ひゝる也へ胡路ご心を適ひ釈ゝ仕ひゝる姫ゝ
ゝ安家ゝく姑ゝ知ゝ者ゝ形ゝ沢ゝ小睦ゝくなりゝく人前
を顧ゝ戯ゝ事ゝ小ゝ舉家の者知ゝ事ゝ小ゝ事ゝ開ゝ常に
長ゝ小皆胡路を畏ゝ仕ゝ者ゝ小ゝ成ゝ小ゝ事ゝ小ゝ長ゝ者ゝ那
長ゝ小猶ゝ尚ゝ主ゝ我意を揮ひ猶ゝ小ゝ恐ゝ
なゝれ小ゝ奈の婢僕ゝ小ゝ奈ゝく横ゝく人ゝ論ゝ小ゝ主ゝと
飲ゝく過ゝ小ゝ奈二又ゝ雨ゝ情を表ゝく打ゝく戯ゝ成ゝれど
ゝ也ゝ也ゝ小ゝ奈二ゝと也ゝく居ゝく人ゝ也ゝ堅ゝ恥ゝ也ゝ
ゝ小ゝ女ゝ糧ゝ小ゝ奈人ゝ知ゝ主ゝん小ゝ恐怒ゝ成ゝ

或は修羅に活く戯れ弄ぶ面耐得ずして這賊奴何程ぞめ此
放肆なること空しく愧じめ怒れば宋二を怒り罵り詈り
夜雨短宵孤燈冷ふ宋二を踏倒し勇力に拳を振ひ
宋二は痛苦に堪ぬと注連を言す拉起して小児の如
拳を如く眼を睜り投飛して石に落ち古井
あり轉々として井に落ち拳を振ひ
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
悔して走出て探捉す者なし此時宋江
正是身如五鼓街山月命似三更油盡燈長ハ面色の如く慌忙
〳〵て僕と馳騁と雖も基と是れて始て甦生る珊瑚を

大なる蛇の子を抱く三尺の美厄を吞んとせ
事よ面を出すと雖も宋二を捉へ急を逃げ抱
ちに出る面を怒紅に成て過を悔ず罪を謝
力量を出すと雖も朝路に出る妻面を大
踏〳〵惡人〳〵暴く南り力を放蕩する女を侵害バ
志如の形を笑と雖も圓を新〳〵幸面を変る
出バ逃る部を逃ると雖も長
変の青面形を怒紅に成て過を悔ず罪を謝
日毎に罵り怒く面裏る小法を生ると仍すと
怒く知己の方に出て忠義を湯〳〵
美の乃潤色を小〳〵の人絡〳〵ひ〳〵る翔鶴は妻面を

左し間よりも妻二て妻通すこと甚だ妻二ハ今すぐハ
甚面ご雪力ハ恐きかし怪しかるべきかと清くこと
ゑんの如く振舞長と茂如し家を押領をんし邪淫ゑ
悪心を勧め竊ふ長を教唆し世を怪しびまの妻乃樂をか
うんと商法をこえめ打を伺ひくるよ長邪気を侵されて両三日
お邪めりけるを幸し妻二郎悪ゑるをんの醫生を機関をれ
で胡路許多の財を盤うく病ふ逆ゑ生をとゑく宮をん
これ邪ゑうれで醫生心ゑすく同意しく日く隆治をれ
す作ゑく酒勢の場をすこ方剤を用ひられでを月後う
みく逐邪よ衰打し死しうれで胡路俄哭して墓を造の
式をもし親族よい計く宮をと心付者をれく妻二ハ

竊よ重なるしきうく歎きてあうくふ表明を假ゆと
動きを待く敵を出さきてこと事をるきバ敵る隙く襲ふ
るも能ハ世ハ人義ゑ人ハ妻ゑ事を追慕しく日和
哭しく居さうに一変涙文よりく長ゑ面ご抱て
邪まてご動死悔をまよ清ア女子きバかりを動ア
父ゑさて世を去ゑゑひしふを及び湯を飲をし狐狸の怪を
なすゑゑひんと知あられで長ゑ同文よ狐狸ゑうお拭る
茂見水よ起くこと子も泄ゑ生ゑ茂べき事ゑくく再ふ表ゑう
平日まご泄ゑ泄くご面ゑ捨ひ子ゑ思ゑ居き所ゑ妻ゑ敵
庶ゑ女すく提妬ゑき相続ゑるきバ表ゑしバ他ゑ高ゑ通ゑ
べく知く捨ひ子ゑく歎さ妻ゑバ清く面ゑ通ゑ通ゑ

その有り様を聞き、驚き怪しみ、孫二娘と共に、
しく喜び、我が家に掛け上がり、
を我が子のように思ひ、
怒り、
我と共に、
ハ、
女房に、
至者、
出立、
しく、
始末、

継母孫二娘、悪の限りを尽くし、
を低くし、
消えく、
つて、
しより、
亜日、
出来、
を待ち、
おり、
乃ち、
どひ、

泣叫ぶ、
涙を流し、
人と、
長ぶ、
放つ、
哭す、
思ひ、
織り、
嘲る、
男子、
業刀剣を、
寓せ、
知れず、
死亡、
裏より、
入れ、
二杯、
酒を、
酩酊、
戯れ、
深更、
熟睡、
二人、
抜き、
窃に、
入り、
時、
二人の、
水の、
刺を、

抜もちかよりうちを押破て入来るに驚騒ぐを八淫蔵に
て入来りし淫婦綱路を走るを両断に斬放せバ忽ニ瞎
魂魄ハ飛で戦栗しきえんとするを是をずず呼ばんとする所
鄙の夫手師松ひるみるを「非婦が摸を妻が継母と女の通
よりて実父を害して怨み思ひ起しく卒に害を五体を
寸々に斬破り呈将く苦痛するを見て快く笑ひいざや
此母の膈をこゝろきるんと咽を刺し貫き息絶させて淫蔵の懸
まりさんが為のしこゝろ快くあり金銀を探り出して悵望
静に始終を入し方へ出行ぬるを見るに若者なり正是
杳々冥々地非く是天害人終自害恨計総徒然長が家
乃脊ハ夜明るまで乃ちくる抜身を知ざることに年時までのんとなれ

本起出ざる此怪に国乃刀まで鮮血座に淫屍狼藉
まべ各一驚を喫し急ぎ親族を招き集めく右を見
せしむるに諸の金銀を亡し衆も罵詐しみをれバ
親ひる其淫蔵の所為なりる事を吹しかく両親亡し
上ハ家を継べき者もあれど英雨長が実子なるを
知者ありしれど呼戻すべしと衆議を定しよそく英雨が方
へ人をつかはせバ英雨驚き急ぎ体をつく速に家に帰る時ハ
綱路が葬送をすまし亦二が屍ハ親の元へ送りて葬らる
送しかれど英雨一人家の主となりて親族より入婿の事
を勧むるといへども已に鬼夜叉に階老の約をなしぬれバ妻を
娶らざる志なく何卒鬼夜叉を迎へ招んと只待くれど

絶く事絶て二年ばかりも有しが心ゆるさず探りとるべく
人をして紙を持ぶらみ識さる所の物を悉く蒐集し猶深く
ゆ聞きあり此こゝに白井秀蘭と云女子ト筮の術を好む
者あり人の吉凶禍福をよくあふ一度道中を歩く祕
術の品を識辨し亡失せしものを正を明らかにする事神の如く亨
はるべしこゝに父も砂一の成まうり
よりみく家都より繼通暁し孫呉の奥祕を得うりれば尊
敬しく門生市をなんとを与者多くなりしかも乱の世なれば
者をひらきバ数へ尽まじく事小任ぶと云ども諸国を
遊歴する所所ふ門人と称ずる者多りくまあるを山琴
を耳秀蘭ゴスコ身ひりて鬼薊内ゲ任所を尋られて秀

蘭益を取卦を考へく云ふるハ山人求ふ所ひとく同じ少年と五
千里乃ゆるる壷関あり捕らまてく今獄中あり物ものと
やゞて皆ゆ事を考るの所ふべしこゝに遠き国ト
ひりと聞く驚る紀恐乃仲ふ秀蘭重く曰我
河を任ずんバ之より彼所ふ面く山嶽あり中ふ小ゞ
同じく壷関ふ赴し婦人あり是より程近ければ尋ひて
問ゞ我河の遠ざるを知ん侍人を使ひ紙あり唯一人
尋ねべく教くしで和尚ト云ふ小ゞ心安くして
之方角と考へハ河州の生駒山ふ面りあるバ数乃如く
唯独り僕ともに連ゞ出行ふ足遠ふ程ゆ程ゆ
河州ふ入ル生駒山乃滝泥ふ登ふ人跡乃稀なるとも

恐れて奥深く逃げ入れば、熊人衆賊を従へて、寨を開き、

第六回

春雨諸婦を伴ひて家に帰る

借り夕紅八重園詩岳く山寨に連日種し商議をなし
一先洛に向ふ事なんと月華雪先を出でんとまどひ忽ち
山賊の中に郎に行向ひ居り京都大地震あり
我住しなりハ人家悉く頽倒して郊原の如くなり果て
と若しなば其元向ふ山寨に帰りて京に
華を求ハ命まで人に付ハ能人と云賊あり雪力和係ありを
見て好きの心深く兼て玉園に深く慕しあり先
頃頼て都に者の妻なるを知りて好色なる者と

事ハ口流落しなハ自ら我賊首になり計策をもなすべし
自ら情欲念盛んなりて竊に艶書を送り玉園が傍近く往
る女子に手紙を与へかくふるく切なる思ひを様く言れば
玉園大なる怒りて先づ女を縛して一室に入れ岳に向
語り出すべきと謂ふ熊岳が曰頭を落すべきと
さる左廉下の衆賊我を侮り怪んずる心を生ずべ
事なるを櫻を事とするを岳を良し
然して知雪有て役小なる立べき熊人を怪忽に
呼を結ばんも無くして謂ずして良に慢を振ふ
計ふべし商家に一日廉下に属する賊を
ら集め豊盛なる宴席を設け玉園と始て岳

久敬まも丈乃帯まを座すまう正まをみくまうり沼弟を列ねく
たもまを座し酒まを酿よ乃ゑく玉園法織を向むは度豪の
知ら如く我丈并まこ二人乃こ領まを影人ゑうこ乃も壱国ホ
因まてくなまバ我く心を一致よ和し財宝を集め彼国乃
三王に絹をし如く為ゑ乃ゑ渡海し四人を連へ海んこ以
紙し当夜種くホ男を四てもう寄も共ホ力を合せ日
比の姫こもを高まざくんこもを庶義すく濱流すまバ応賊
一齊よ当こを抜へは度四公の災難、彩ゑてを浮く歓を
不ゑまバ行く我く早く彼ホ上よ渡海し報元帰りく当日の
恵美を謝きんく以紙すく心切るまバ知ら も疎畧を行ら
と当まを戻龍岳進く玉当の神ゑう志を当く感心

さう丈の帰ら岳バ我く丈ら易ゑて離下れ法合を正さう
彩まバ浦ゑの中働を抜ぐみを汚闘ら遠ら行くバ法席
ま於く商議し当罪をなきんは当ら行ら事以
効む当ら品行う女彩まこを飛敏し雑まバ今は席上
ま於く諫罪し侍未を戒んく小賊をいくら高の女を
出を龍岳自ら遠ら下まく刀を抜ら首ホ帰し
当く列座乃面ゑを四ら人まバ逃人い報元ら
知ら手面彩ハ当ら飛も罪を知めらき新過を行く
黙ら行ら知の紙を罪を為く知す呂敬を行ら事
くのこを行ら知ら酒賞ホ法バ落く別き帰んら
ら逃人を早く立く別ら過運ら当法ら待ら結く霧ら

驕慢淫する悪しき者共を招き集めて擁くする唐人が靡下
小備して金をうるとハ諂諛ふ者すくなからず無術とみをや
得るまでハ名将の忠精も巡ず文厳しき牢獄の中にいるべくと
極ふ出生を事あらん故に平日ハ知不諂ふて危難の時を遁まん
為なり然るに今唐人共が本朝国に周りまてぬかれば婦人の宝
貨物爰女を雅乃人あそび渡海し贈ひ帰らんと欲すると思ゆ
くハ力乃及ぶ程ハ鬱なべからず徒に年を経んより却て一命ハ
唐人の心中を揺中より病を発し衰へ果てはやく死し誠ハ
存生すとも物の用に立べからず以刑まで又男子の身として婦人
系の下知を請る無念をわさんや如し此虚に乗じて五国
詭出を殺害して直ちに攻め来り財宝を掠て配らし

又此度来りし夕虹月華両女ハ雪宮が微弱の女なりしく
恐るゝ事なく容顔も又醜からずまた六韜なくし撫が剣を捕まらさ
んと思ふ也と謂ハ彼の思案もなく速に約を遠くさく志
を変じて打欲の為に媚る色業なくバ誤りて利あり識る嫁よの
主たらく思ふて深く身を一味して人数こまた事に及べく事ハ洩
れぬ先に其意を謀べし女なりとも両人共に剱術雪宮が世に携る
まる心を擾さん大勝雪方より誼も鶏の忿恚なく討れ
でよしき善と極めなる内に早く此事を吉る者あるまで
五国諸出勢く謀り留りし織に下知してて防御の備へを
抑し閉るとも小国大足をと防し得物を取りも億する氣
色なく席に居座し悠然として待居たる夕虹親子ハ

寒後の小高き所に居くらめ、行くて
熊人も二川城を後へ引き、
くまなく着を斬敵し競進く乱入、正是今古人情更無頼翻
手作雲翻手雨し賦せし如くなり四周、大長刀を車に振回し
近寄者を縱横に薙倒し誘岳を遠ひ飛ぶ如く
彼に斬掛り、すきを窺ふ敵人、刀法熟練雷
電の如く、暫時に数十人を斬伏せ、負傷者多し
多く眼を塞ぎ、暫し進ぬ我ふ者なく打続き
而を敵人当と進ぐ斬立て、間もなく敵の後の方へ廻
ると進ぶく熊人を討ちんと八方に眼を配れば熊人も急て
後退し、四方の石を踏まえ、城を人と両人を法

る踏まえ居く、両人思ふ図、あらば射殺さんと、窺ひ
時を待て、次第に細道に出て敵人に近づくあり、
射まんと、ふと、敵人の
る踏まえ居くまば、
つけ、敵人の射を
道を顧る時、四周眼を
熊人、三四人で熊人も刀を持く、我り
後へ引く、薙伏せ、
今、人の射を斬伏
人の者、打も山風烈しく火の
勢、ますます盛んなる烟、
石を投げ、防ぐ、

る燃よう妹宮と行ひ倉庫ハ残らず寒中ハ残らず燈燈
と取り乱れ是非なくまさしくの両婦ハ面白くて世心と
起せり世ハ世ハ嘆ずるに人で夕和歌ハ出来ずなり
石ハ摘み出を今ハ面白と騒ぐ宿ハ人ハ分けきバ一世者
らくらく行方ハ熱さ楼を求め寒を慢しよりて今
合せ宮やと名残しく心変ぞ面ハ山路を変
ぬ郷細すぎ人の婦ハ秀草ハ山路
し調ハ遠ハ人ハ新ひと紀まり婦人の
集り居く皆尋常ハ作ハ中小史乃事と
し婦人ハ進まく軽とれ卜者乃
調ハ拾刑部侍ハ

於毎年ハ寒く鬼面ハ狂侍ハ遠面しく宮殿
の姫ハ川原しるを抱きあらず人御面ハ鬼面
と思ふ心の切ハ面ハ秀草ハ調の部ハ遠ハ
神ハ流行ハ面ハ宮殿ハ波ハ姫と
立千ハ乃ハ獄中ハ有の苦者と悲しく惨殺
を流しく人ハ又ハ時ハ謂しと新ハ
玉園と名ト者ハ神ハ感嘆しハ
と謂しハ神ハ姫ハ者ハ面ハ
寒ハ新ハ面ハ人ハ支ハ胞ハ
の思ひと和しハ力と一致ハ
ハ人ハ婦ハ

[illegible]く嘗て今より八時過ぎなりとなく我も素年の
加へ申すべき勞力して命に堪へ住ぐし名位の俗不和
なる有や事方すると高き年を重ねと聞く今日石関の美尼
つて寡を慌ましくしてと語まで真雨の日報の幸年
多くれ孫のみと共事と業くまば都完るまで教乃間
所を復もくしと名位と面白く再び山寨と捧る
遠き神方より遠面しんやく訪ねて五人の
輩が高居すぎて面白く非まいてよ但し話
あ使ふくいべと申ふ五く山を出遠国に赴く婦人の体
る報ひ接列して名ぎに途中で俄に天色変じ
ち面清泥して降りぐ者うと求めんと見し

四方を見人家の燈火遠く[illegible]林樹を遠く連りく一方の明星を遠う
しが勿ち鐘磬の声近く聞えうまば僧院みて知く其
声の響る方へ向く行へば林を隔く一間の僧院あり殿
閣清靡して門前屋く音閑よ入く楊よりよ再び
清る夜を繰り敲しるべて慧眼かり晴るを待
居り所へ赤き人門よ入来る者あり同じく楊よ
より[illegible]く蓑笠を取を[illegible]んまば頭巾庸るず聰明
人の[illegible]まく思ふ婦人の真雨慌忙しく僧小
進[illegible]禮を拝しれ余人は更よ何人なるやと知ぶ
呉井ちりて拝居り[illegible]

女水滸傳卷之三終

帝朝要樞　四冊

當世藻塩草　四冊

別趣奇談　又冊

本心早合点　一冊

福助母年忌慶宴記　一冊

右彩板五面目書、ひらがなの仮名遣ひ